

前号でガールスカウト指導者の皆様とのコラボレーション研修としてのボランティア活動を紹介しました。

帰ってきて次の日に地元那須烏山市岩子にある仮設住宅に小学生と一緒に新米贈呈式を挙行、続いて被災地への復興支援応援ツアー等目白押しの活動でした。

本号ではJA提供の新米とセットで子どもたちの絵付き応援メッセージや作文を新米贈呈式として実施した「那須烏山まごころ子ども親善大使活動」についてご紹介します。



15名の那須烏山まごころ子ども親善大使～泊浜で

子どもたちに働きかけ優しく魅力溢れる人材を育てたい

昨年度、JA なす南さんから新米の提供を受け、子どもたちが描いた絵付き応援メッセージと共に牡鹿地区に届けたことがきっかけとなり、心温まる「ありがとうの会」実施につながりました。この活動で子どもたちは大きく成長しました。

今年もJA山田組合長から被災地の皆様に新米を提供したいので届けて欲しいと言われました。地元那須烏山市の岩子仮設住宅の皆様へも同様にプレゼントする計画だと聞き、地元の子もたちと一緒に心温まる贈呈式を実施することを提案しました。そして活動名を「那須烏山まごころ子ども親善大使活動」とし、子どもたちの代表を募り、地元も含め現地に行って心の通い合う贈呈式にしたいと説明しました。私の提案に組合長を始め小学校の校長先生や仮設住宅の曾根原自治会長もとても喜んでくれました。

まずは、子どもたちに心寄り添う大切さを訴え、被災地の皆様へ手を差し伸べたいと自ら考え行動する人づくりからスタートすることが成功への近道であり、私の母校である那須烏山市立荒川小学校の鈴木校長先生のところに行き授業内容及び進め方について相談しました。



手作りのタスキ

荒川小学校5年生59名への道徳授業

荒川小5年生59名に私から道徳の授業を実施後、応援メッセージや作文を書いてもらうことにしました。

心寄り添う活動が如何に被災地の皆様の心を動かし元気や笑顔や前向きな気持ちを引き出すことになるかを事例に基づき説明しました。そして児童の皆さんに心をこめて応援の作文や絵を描いてみませんかと訴えました。5年生59名は驚くほど真剣に聞いていました。



心のこもった作品がズラリ

地元の岩子仮設住宅宛と宮城県牡鹿地区宛と2種類書いてもらう約束を子どもたちの大きな返事でもらうことができました。心のこもった作品がたくさん届くことを確信する授業でした。

石巻市の被災地より先に実施する地元「岩子仮設住宅宛」のものができたと鈴木校長先生から連絡がありました。

先生方の熱意ある指導があったと思いますが、私の想像をはるかに超える素晴らしい作品

でした。牡鹿地区用はさらに心を込めて現在取組み中ということでした。

一生懸命さがにじみ出ている今回の子どもたちの絵と作文がどれほど被災された皆様の心を打つかを想像するだけで胸が熱くなる作品ばかりでした。

地元「岩子仮設住宅」で第一弾の贈呈式実施 ～那須烏山まごころ子ども親善大使活動～

ガールスカウトとのコラボレーション活動から帰って次の日の10月15日、大谷市長にも出席いただき贈呈式を実施しました。

まごころ子ども親善大使役は荒川小5年生の4名です。市長の挨拶後、JA 山田組合長から「おいしいお米を食べてさらに元気になってください」と曾根原自治会長に贈呈しました。続いて児童から絵付き応援メッセージの紹介の後、5年生59名を代表して小池将真君が「皆さんに元気になって欲しいと願って一生懸命描きました」と作文を読み上げました。



自治会長に絵をプレゼントする児童代表

鈴木校長先生と児童から歌のプレゼントの時には皆様の顔がほころびました。最後に曾根原会長から「このようなプレゼントは本当に嬉しい。我々も早く仮設から出られるよう皆様に感謝しながら頑張ります。仮設から全員卒業する解村式には児童の皆さんを招待しますので来てください」と挨拶されました。懇談時に応援メッセージを頑張って自宅で一気に描いた話などが紹介され温かな気持ちのまま終了しました。

多くの子どもたちに輝いてもらいたい

第2弾である石巻市に行く日を11月17日と決めた後、車の座席数から参加人数を絞らねばならないが、一方では主役となって輝いてもらう子どもたちにはたくさん参加して欲しいと考えていました。

昨年度の「ありがとうの会」に参加した烏山小中心のガールスカウト及び野球クラブに加え岩子仮設で活躍した荒川小と私の母校荒川中まで声掛けすることにしました。



心寄り添う大切さを訴える～荒川中で

荒川中は昨年度に続き今年度も全校生約200名を対象に「心寄り添うボランティア活動」という講演を行いました。3年生は石巻市立荻浜中学校宛に応援の心をこめた作文を送っています。今回は荻浜中にも新米を届ける計画であり是非、荒川中の代表者に参加してもらい中学生同志の交流の場が作れたらいいなと考えていました。

那須烏山市教育長に協力依頼の説明を行う

多くの先生が被災地に児童・生徒を連れていくことに消極的です。

教育長に龍 JIN キャプテンとして昨年度実施した「ありがとうの会」やその後の活動で如何に子どもたちの優しい心と自ら考え行動する力が育ったかを事例をあげて説明し協力を求めました。



教育長は龍 JIN の理念や具体的な活動について大きな信頼を寄せ「ありがとうございました。本来は学校がこのような活動を行わねばならないところ、龍 JIN が代わってやってくれている。感謝している」と言ってくださいました。彼は昨年度実施した「ありがとうの会」の時には個人的に壱万円也の餞別金を用意してくれましたが、龍 JIN メンバーがびっくりする出来事でした。

今回のまごころ子ども親善大使活動についても市内小中学校への協力について、教育長としてできる限りの応援をしたいと約束してくれました。

JAなす南役員の皆様の心遣い

今回、牡鹿地区に贈呈する栃木の新米は6か所の集落や学校及び仮設住宅で合計300Kgです。JAなす南では山田組合長以下全役員の皆様が個人的に拠出してくれたのです。

しかも全てではないものの、子どもたちの活動に見習って5Kgに小分けした米袋に応援メッセージが添付されているのです。

子どもたちの温かな心と同様JAなす南役員の皆様の心が伝わるだろうと思いました。



応援メッセージ付の新米を渡すJA新井専務

子どもたちの輝くばかりの応援メッセージと作文

昨年度同様烏山小学校中心のガールスカウト及び一部那須烏山市立七合小を含む烏山クラブ野球部の子どもたちからの作品に加え荒川小59名から届いた応援メッセージと作文をめぐってみてびっくりしました。

丁寧に仕上げた絵も感動的でしたが、子どもたち一人一人が自分の地震の恐怖経験から感じたものを通して東北の人たちへの心寄り添う気持ちが短い文章にぎゅっと詰まっているのです。思わず涙してしまうものが次々と出てくるのです。

これはいくらお金を使っても全カラー印刷して全個所にプレゼントしたいと思い、市役所に相談に行きましたが快く引き受けてくださいました。かかった経費をはるかに凌ぐ作品でした。



涙する作文と応援の絵

子ども15名を含む29名で「まごころ子ども親善大使」出発

主役の子どもたち

当初、子どもたちの代表を絞りワンボックスカー2台で計画しましたが前号で紹介した栃木県ガールスカウトの指導者の皆さんが早速、多くの子どもたちを参加させたいと要請してきました。

「どうしても参加したいと自ら考え行動する子どもだったらいいよ」と伝えたところ嬉しいことにどんどん人数が増え、安全面も考慮しマイクロバス1台を追加することにしました。

最終的に「まごころ子ども親善大使」として集まってくれたのは荒川小1、荒川中2、烏山クラブ1、那須烏山ガールスカウト7、他支部ガールスカウト4、ガールスカウト指導者3、JA代表1、荒川小校長先生、下野新聞記者、龍 JIN8名の合計29名でマイクロバスとワンボックスカーに分乗して朝5時に出発しました。

往きのバスの中で、多くの子どもたちに主役となってもらうため司会他を役割分担した贈呈式の練習をしました。子どもたちの自己紹介も含め「心寄り添うことと一生懸命さ及び自ら考え行動する」をキーワードに練習を重ねました。

用意してくれた作文の中でガールスカウト小川萌華さん(小6)の「ありがとうの会」の思い出をつづった作文は私たちに深い感銘を与えるものでしばらくバスの中が「しーん」となるほどでした。作文コンクールで入選したそうです。別紙に一部を添付しますので読んでください。



荒川中代表
小松兄弟

烏山クラブ
代表羽石君

荻浜中学校から親善大使活動スタート

石巻市立荻浜中は在校生10人で昨年度「ありがとうの会」実施に際して全面的に協力してくれた学校で、その後子ども同士が手紙の交流をしています。前述した通り、那須烏山市立荒川中3年生が応援の手紙を送っています。

荻浜中の給食は自校式ではないものの荻浜地区の皆さんが食育授業で海の幸を使った料理教室を実施しており新米贈呈を喜んでくれました。荻浜小も同じでした。

たまたま、この日の午後、荻浜中は創立30周年記念式典挙行という特別な日でした。常識では生徒たちを集めて贈呈式実施などは受け入れてもらえませんが、私の提案に快く応じてくださいました。午前中の10分間の休憩時間に生徒会役員の皆さんに集まってもらい荒川中代表の生徒との交流も含めて贈呈式を実施するという計画です。荻浜中は震災後、応接室や来賓室などが使えない状況のため贈呈式実施予定の図書館もその時間だけ開けるのでそれまで校庭で待つことになりました。実際には事前に図書館も使えるように調整して迎えてくれました。

子どもたちの司会で贈呈式をスタートし、JAなす南新井専務から荻浜小も含めて新米を贈呈した後、荒川中3年小松彩子さんが「笑顔とお米を届けに来ました。皆さんのことを絶対忘れません」と挨拶しました。荻浜中生徒会長の平塚桃香さんから返礼の挨拶の後、昨年度の「ありがとうの会」以降、手紙の交流をしていた堀江心乃ちゃん(小4)が今回持参した手紙を渡したり、子どもたち全員とのハイタッチなどの交流をしました。



荻浜中生徒会役員との交流

最後に木村教頭先生から「いつまでも人に頼るのでなく感謝の気持ちを持って自分からこの厳しい状況を切り開いていく生き抜く力を持った人間を育成したい。今日はありがとうございました」とお礼の言葉でまとめていただきました。

周年行事で忙しい中、時間をとっていただいたことに感謝しながら荻浜に向かいました。

ほとんどの皆様が集まってくれた荻浜

3日前に牡蠣加工建屋が完成し、牡蠣むき作業で活気が戻ってきた荻浜では息子さん世代を含めて多くの皆様が集まってくれました。JAによる新米贈呈後、練習した通り子どもたちの楽しい自己紹介に始まり、作文朗読など子どもたちのプレゼントが続き、最後に鈴木校長先生指揮の元、「故郷」と「ビリーブ」を浜の皆様と一緒に歌いました。

豊嶋区長が「遠くから来てこのような会を開いてくれてありがとうございます。自分たちも一生懸命復興のため頑張るので応援よろしくお願いします。今日は牡蠣むきが始まったばかりですが見学してください」と挨拶されました。息子さん世代の代表の方が「子どもたちの作文に思わず涙が出てしまいました。お礼にこのむいたばかりの生牡蠣を食べてください」とたくさんの牡蠣をくれました。全員に分けても余るほどでした。お断りしましたが彼らのご厚意を受け

作文を紹介する荒川小5年渡辺海人君



自己紹介の様子

ない訳にはいきませんでした。今回も荻浜の阿部さんは子どもたち全員に手作りのお守り人形を作って待っていてくれました。いつもの心遣いに感謝いたします。



牡蠣むき作業について **子どもの各代表から作文と絵を贈呈**して浜の皆さんが丁寧に説明してくれました。子どもたちも浜の皆様も本当に嬉しそうに笑顔で受け答えしていたことが印象的でした。



笑顔で説明する阿部さん

鮎川小仮設住宅集会所

鮎川地区の仮設店舗でいつも先頭に立って頑張っている黄金寿司さんが子ども向けお寿司弁当を集会所に運び準備万端で待っていてくれました。豪華なお寿司弁当を食べながら、集まってくれた民宿泰平荘の阿部さんや黄金寿司経営者の古内区長の友知人に子どもたちの作文を聞いてもらいながら新米を贈呈しました。子どもたちへの質問などで交流している間に昼食の時間があっという間に過ぎ、慌てて次の会場である泊浜に向かいました。

太平洋を望む海の幸豊かな泊浜

石巻市泊浜は太平洋を望む50数軒が海までの傾斜に沿って立ち並ぶ集落で、海から近い17軒が流失しました。途中の道路が壊れ道幅が半分になっているところが多く、中々足を延ばせない地区です。震災直後は全く陸の孤島となってしまう最初に支援の手を差し伸べてくれたのが米国戦艦空母からのヘリコプターだったところです。



太平洋を望む泊浜

現在は道路の修繕が進んだこととマイクロバスでの移動であることに加え、泊浜のリーダーである平塚さんから「どうしていつも泊浜には来てくれないのだ」と言われていたため、今回予定に入ったことで私もホッとしていました。

泊浜の集会所には平塚さんが外に出て首を長くして待っていてくれました。食事は済ませていくことを連絡していましたが、獲ったばかりの食材で鮭鍋を用意していました。さらに昨年度の「ありがとうの会」で作ってくださった大阪出身の松川さんが今回もお好み焼きを焼いて待っていてくれました。これだけでも胸が熱くなりました。今回、子どもさんのイベントで「出席できなく残念です」と連絡があった泊浜地区の元小学校PTA会長の松川由美さんは、当日どうしても皆さんに会いたいと何回も電話をかけてきました。



子どもたち各代表と泊浜の皆様と

こんなに喜んでくれているんだと実感しました。子どもたちが活躍する一連のプログラムの中で浜の人たちへの思いを優しい心でつづった小川萌華さんの作文に胸を打たれました。平塚さんとの手紙の交流を紹介した中で「ストレスで時々具合が悪くなるという平塚さんのことを

私はいつも思っています」という文章に多くの皆さんが涙しながら聞いていました。

時間はあっという間に過ぎます。どうしても泊浜の津波の凄さと同時に海の綺麗さと豊かさを子どもたちに見せてあげようと計画しましたがあいにくの雨になってしまい浜までは行ったものの車窓のみで泊浜を後にしました。



作文を紹介した小川萌華さん(小6)右端

石巻市門脇地区尾形焼きそば店に立ち寄る

親善大使活動最後は門脇地区尾形さんのところへ。あいにくの雨が本降りとなりバスに乗り込んでもらって尾形さんの話を聞きました。新米及び子どもたちからの応援メッセージなどのプレゼントセレモニーの後、尾形さんが子どもたちに「被災した人たちが大変辛い思いをしながらもみんな頑張っていることを皆さんが先頭に立って学校や近所の友達に話をして欲しい」と話されたことが心に残りました。

多くの場所を訪れ、どの場所でも大歓迎され時間も予定より90分と大幅に遅れてまごころ子ども親善大使活動を終了しました。

帰りのバスの中で

翌日の尾形焼きそば店でのボランティア活動のために宿泊する私を含む龍 JIN メンバー8名と尾形さんとで栃木に帰るマイクロバスを見送りました。

帰りのバスの中でガールスカウトリーダーの三森紀子さんに子どもたちの感想をそれぞれ発表するプログラムをお願いしていましたが、ガールスカウトの堀江心乃ちゃん(小4)が誰からの命令もなしに自らマイクを持ちみんなに感想を発表してもらおう司会役をやリ遂げてしまったことや浜の人たちに聞いてもらった歌をみんなで歌いながらあっという間に栃木に着いたことを三森リーダーから聞き、「優しい心と人のために自ら考え行動する力が育つ活動」を実感し嬉しくなりました。

ありがとうの会で
肩たたきをする
堀江心乃ちゃん



翌日の石巻市門脇尾形焼きそば店でのボランティア活動

親善大使活動終了の夜は前号で紹介した阿部さんの民宿泰平荘で漁師の息子さんが獲ってくる肝付き鮑や鯨の刺身などの豪華な海の幸をいただき、阿部さん家族との楽しい時間を過ごしました。次の日、たまたま仮設店舗おしかのれん街開店一周年記念行事があり、鮎川小学校の子どもたちの演ずる太鼓を是非聞いて欲しいと何人もの人から勧められていたので立ち寄ることにしました。

子どもたちが懸命に演奏している姿には大人たちを感動させ、ほとぼしるほどの元気と勇気がもらえます。将に子どもたちの太鼓にはこの力がありました。浜の人たちが聞きたびに涙が出てくるんだと言っていた通りでした。



おしかのれん街1周年記念行事～子供太鼓

2時間以上遅れて門脇地区尾形さんの焼きそば店「味平」に着きました。

尾形さんの当面の夢である、来てくれる人にありがとうを伝える場及び情報交換の場としての「ありがとうハウス」建設は石巻の大工さんが簡易ハウスではあるものの作り始めていまし

た。トイレなど、少しずつ出来上がればいいのでこれからも応援して欲しいと話されました。

水洗トイレをハウスの外に作るにしても下水道が復旧しないと難しいこともありその第一歩として詰まったままの側溝の泥出しをお願いされました。

公の側溝はある程度ボランティアの協力や行政の力で復旧しているものの個人の側溝はそのままになっています。

尾形さんを含め龍 JIN9名の力は凄いです。2時間ちょっとで作業は終了しました。

近くなので是非我が家に来て欲しいと尾形さんから誘われみんなで立ち寄り、今までの体験談やこれからのことなどの話を聞かせていただきました。尾形さんとさらに仲良しになりました。

側溝の泥出し～尾形焼きそば店で



活動を終えて

今回の2日間の活動は、どの地区も喜んで迎えてくれ、子どもたちへの手作り人形、牡蠣や鮭に干したサンマなど海の幸のおみやげまで用意して待っていてくれました。喜んでもらえていることを実感し、これからも継続して取り組まなければとの思いを強くしました。子どもたちが人間として成長する姿を見せてくれることも嬉しさを倍にしてくれます。

これらのことに感謝すると同時に「活動の終わりとは」という難題についてずっと考えながら帰ってきました。

今回の活動も地元下野新聞動画サイト DoSoon に紹介されています。ご覧ください。

<http://www.shimotsuke.co.jp/dosoon/town/nasukarasuyama/official/20121119/925050>



ありがとうハウス建設を目指して

添付資料=今回の活動で紹介した小川萌華さんの作文 (全文でないことをお許しください)

石巻のボランティア活動に参加して(抜粋版)

烏山小6年 小川萌華

～(略)～ 交流会が終わってから泊浜の平塚さんと手紙のやりとりが始まりました。家族のことや学校のできごとを送っていますが平塚さんはいつも便せん2～3枚を使っていてねいに書かれていてとても心遣いを感じます。



手紙の中で「ストレスで時々具合が悪くなることもあります。でも、みなさんの歌や踊り、楽しかったです。肩たたきも気持ち良かったです」と書いてあり、少しでも役に立てて、やっぱり行って良かったと思いました。

また、「私は震災で全てを失くしたけれどみなさんの優しさなど、得られたこともいっぱいあります。また一歩前へ進んでいくようがんばります」という言葉がとても心に残りました。

～(略)～

平塚さんは、最初は海でかきの養殖の仕事をしていたけれど津波で船が流されてできなくなったそうです。

また、かきの仕事にもどりたいけれど、かきをそだてるのにはとても時間がかかるので、今は養殖わかめの仕事を一生懸命がんばっているそうです。だから、私はいつも手紙で応援しています。「今はまだ大変なこともたくさんあるでしょうが、私は、いつも平塚さんのことを思っています。がんばってください」と。

私たちは、以前と同じように生活しているけれど、1年以上たった今でもまだ、石巻では、仮設住宅で生活をしている人もたくさんいるし、思うような仕事ができずにいる人もいます。みんながんばってもとの仕事に戻ろうとしています。

私たちにできることもたくさんあります。思っているだけでなく、何か行動を起こすことが大切であることを私は今回のことで学ぶことができました。